

北方領土については、現実をしっかりと捉え、今後どうしていくかを考えるべきであることを認識しておかなければならない。しかし、すべての日本国民がそれを認識しているのかという疑問が残る。私は和歌山県に在住しているが、身近な人に北方領土問題について何を知っているか聞いてみると、「ロシアに不法に占拠されていて、早く返してくれたらいいのに。」という



ような回答が多い。この意見が悪いと言うわけではないが、第三者的な立場で感じている人が圧倒的に多いように感じる。和歌山県という、北方領土から遠い距離にあることが原因なのか、政治や外交に興味が薄いのか、それはわからない。国民全体がもっと当事者意識を高める必要があるのではないか。今回、現地に赴き感じたことは、私自身も当事者意識の低さを反省しなければならないということである。この問題を前進させるには、国民全体にこれを当事者として意識し、浸透させていくことが大切であると考えます。



納沙布岬から国後島、歯舞群島（貝殻島）を見学したが、北方領土は、「近くて遠い」と感じた。船を出せばあっという間につくほどの距離にあるのに、一向に近づけないのである。納沙布岬にある「北方館」には、島の概要や、かつて日本国民が住んでいた状況や歴史的な経緯が展示されており、館長からは詳しいことを聞くことができた。特に感じたのは、昆布をはじめとする漁業の理不尽さである。日本の領土であるのにも関わらずロシアに採取量として年間9,084万円を支払っている。さらに2006年には北海道本島と貝殻島の間ライン付近でカニ漁を行っていた第31吉進丸の青年が射殺されたり、違う漁船が拿捕されたりする現実があることに驚かされる。漁業関係者の方々の不安は計り知れないであろうと感じた。

また、元島民の河田弘登志氏、久松敬一氏に当時の話を聞いて衝撃を受けた。終戦後、ソ連軍が自宅に土足で上がり込み、銃で天井に穴をあけ、武器を隠し持っていないか、日本兵を匿っていないかを確認したそうである。当時の島民の方々は何が起きているのか、兵隊がソ連軍なのかさえわからない状況の中、不安な毎日を過ごし、島から脱出するために、深夜の荒波の中、出向した人もいたとのことである。

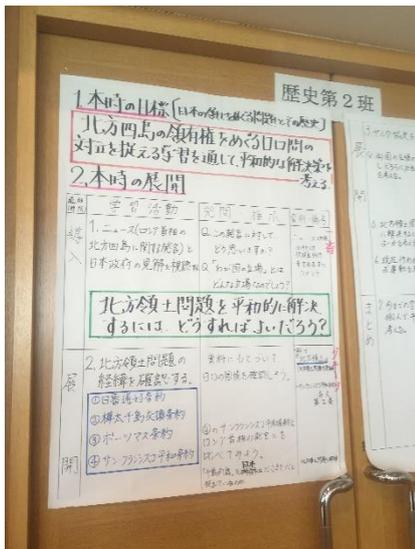
途中で難破し、亡くなった方々も多く、何とか島から脱出できたとしても、身寄りのない人は苦しい生活を余儀なくされた。終戦したとはいえ、さらなる苦しい生活が待っていたのである。

そして、戦後数十年経った今でも、墓参することさえ困難で、生まれ育った島には簡単に渡ることができない。1日目の研修会は、私の計り知れないことばかりで、戸惑った。

しかし、私たちにはできることは何かという新たな気持ちも芽生えてきた。それは、教育指導者にしかでき



ないことは何であるのかをしっかりと考えていくことの必要性である。



今回の研修には、全国各地から社会科の教員、北方領土について学んだ中学生が参加した。この研修で、私たち教員ができることは、伝えることであると再認識した。それは、授業を通して行うこと、そして、身近な人々に当事者意識を浸透させていくことである。前者の検討を中心に工夫を凝らし、「何を伝え、何を考えさせなければならないか」を思案したが、地理的分野、歴史的分野、公民的分野のつながりを見据えていかなければならないことなど、授業の構成で沢山のヒントがあった。地理的分野では、もちろん島の名称や特産物、漁業の実情などを捉える。そして私が担当した歴史的分野では、史実を確認するということが重

要である。条約の変遷とその際の国境線の位置を確認しながら、国際的な法に則り日本の主張を確実に捉えさせていくことで日本国民の歴史認識を構築する。そのベースに立ち、歴史的視点から未来志向へとつなげるのが公民的分野である。ここでは、元島民、漁業関係者、北方領土に現住しているロシア人、政府の見解の視点を入れていくことも考えていかなければならない。見方を変えれば意見も変容するかもしれない。しかし、北方領土は日本の領土であることは揺るぎない事実であり、それを解決していかなければならないのである。授業を通して、子供たちには、上記のことを伝えなければならないが、今後必要となるのは、対話力であるとも感じた。多様な考え方をもち、それを集約し、自分の意見を伝える工夫が必要である。北方領土の正しい知識をもちながら、この問題を平和的な解決に向かう方法を模索し、発信できる力をつけていきたい。客観的思考を基本としながらも、主観的思考を育てていくことで、それが達成できるのではないかと考える。



今回参加した中学生が作成した壁新聞を見て、感心させられた。そこには、北方領土の概要、歴史的変遷、現在の日ロ関係、元島民の思いが書かれていて、最後に自分の感想があった。「私は、平和な時代に生まれたので、故郷が失われた悲しさ、戦争の恐ろしさなどを直に感じたことはありません。…中略… 決して他人事と考えてはいけな思いました。…中略… 私はこの研修で、情報発信者となったので一人でも多くの人に伝えていきたいです。」(兵庫県)ここに私たちができることが集約されているように思う。まさしく当事者意識をもって他人事で済ませてはいけなないのである。

すでに、元島民の方々の平均年齢は84歳になり、先延ばしにできるものでもない。そうとは言え簡単に解決できるものでもない。しかし、この問題を風化させず、取り組み続けることが大切である。私たちにできること。日本全体の問題として捉え、多くの国民が当事者意識をもっていくことこそが解決に向かう道しるべなのである。